

## 若手教員の指導力・授業力向上とベテラン教員の教育的財産の継承

－ ベテランと若手の抽出児ペア観察による校内研究を通して －

所属校：国分寺市立第二小学校

氏名：大宝院清孝

派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：若手育成・校内研究・アクションリサーチ・学習観

### I 研究の目的

#### 1 自身の経験と課題から

私が教師になって10年目。同じ学年を組んだ新規採用教員が2学期末に自主退職した。その新採教員も苦しみ、児童もつらい思いをし、保護者も悩んでいた。自分なりの全力は尽くした。しかし、その新採教員に伝えられたことは、精神論とハウツーであり、その時その時の対処療法的なアドバイスをすることで精一杯だった。自分自身が若手教員の悩みを理解し、そのことを一緒に解決していける力量がないことを痛感した。

#### 2 東京都の教育課題から

東京都教育ビジョン21には「現職教員の資質向上」という課題がある。大量退職に伴う大量採用という現状は今後十年前後続くことが予測されている。学校現場で言えば、年齢構成バランスが崩れ、経験年数が浅い若手教員が分掌で中心的な仕事を任されることを意味する。それは授業研究や教材研究、子供理解や保護者対応といった教師として基礎的な内容について、計画したり省察したりしながら、教師としての力量を高めていく経験を極端に貧弱なものにしている。

#### 3 若手教員研修の課題から

東京都では、初任者研修・2年次3年次4年次研修など、若手育成のための研修制度が設定されているが、現場のニーズと違う部分もある。①公務員養成という意味でも、複雑で重層的な業務内容をもつ教員養成という意味でも、研修内容が多次元で多岐にわたり、その時その若手教員にとって必要感のある研修にすることが困難である。②新学習指導要領の時数増加により、週5日間の中で5時間授業は1日しかなく、会議すら時間設定が厳しい多忙化の現状がある。その中で、学校外での研修が多い。また研修時数の書類報告など、若手教員の研修が形式的なことに時間をとられ過ぎている。③教育課題が多様化し、児童や保護者の対応も複雑になっている現実日々対応している状況では、現場で悩んでいること・困っていることを校内で具体的に相談していける体制を組織する方が、若手育成としては有効な場合が多い。つまり、若手教員を育成していく校内での研修体制の実質的整備が非常に重要な

課題であると言える。現在、対応策としてOJTが導入されているが、それを組織的に動かしていく為の打ち合わせの時間が作り出せない勤務状況がある。

以上3点の課題から、ベテラン教員の教育的財産を若手教員に継承していくことが重要であると考え、その一番の契機となる場面を校内研究と捉えた。そこで、校内研究における次のような仮説を立てた。

仮説①ベテランと若手がペアで抽出児童の学習を観察することで、子供観や授業観や学習観の交流が生まれ、それぞれの観が更新できるのではないかと。

仮説②ワークショップ型の協議会にすることにより、主体的な協議会になるのではないかと。

仮説③様々なテーマや教科の校内研究でも活用できる協議会の持ち方が提案できるのではないかと。

これらの仮説を所属校でのアクション・リサーチを通して検証してみたい。

### II 研究の方法

#### 1 所属校におけるアクション・リサーチ

##### (1) 校内研究の概要

○研究教科・・・算数少数指導「思考力を育てる」

○学校規模・・・通常19学級 特別支援3学級

##### (2) 協議会の提案・実施・改善

○協議会・・・6月、9月、10月、11月

○抽出児をペアで観察・記録。自分の見取りを書く。

○ペア協議→グループ協議→全体協議

#### 2 アンケートとインタビューによる調査と分析

○全教員アンケート・・・6月、9月（21枚回収）

○若手教員インタビュー・・・11月（6名）

### III 研究の結果

#### 1 アンケートやインタビューから考えられる成果

##### (1) 教員としての学びにかかわる変化

①主体的な学びができた②違う視点に学ぶことができた③学び合いがあった④発言の場が保障されていた⑤教材の見方・捉え方を学べた⑥すぐに生かせる技術を得られた、等、教員としての学びが高まったと感じている教員が多かった。

## (2) 授業観や児童観にかかわる変化

①児童の事実から授業を考えるよさを感じた②一人の児童へのまなざしが深まった、等、授業観や児童観の変容を感じている教員がいた。

## (3) 教師としての力量形成にかかわる変化

①自分の実践を振り返ることができた②メンターとの出会いがあった、等、教師として成長していく契機をつかんでいる教員がいた。

## 2 アンケートやインタビューから考えられる課題

### (1) ペアの組み方について

①機械的なペアは必ずしも効果的でない、等、学校状況に応じて柔軟に対応する必要がある。

### (2) 抽出児観察について

①他の児童を観られない②一人の児童からは気付きが少ない、等、一人の抽出児をずっと観る形態についての不満や疑問があった。児童観の変容を促す校内研究としても効果が薄かったという課題がある。

### (3) 協議の内容について

①児童の姿の理由まで話せない②授業全体を観たい③話題が授業全体のことになる、等、協議される内容が、児童の姿ではなく授業全体のことになったという課題がある。

## IV 考察

### (1) 仮説の検証

以上の結果から、仮説①については、抽出児童という焦点化された事実を基に語り合うことで、授業や児童の捉え方・観方の共通点や差異をより具体的に交流できた。それは若手教員だけでなくベテラン教員も観の更新の機会となった。また、仮説②については、ペアによるシェアやグループでの協議を通したディスカッションという少人数での学び合いを経ることで、主体的な協議会になったと考える。最後に仮説③については検証には至らなかったが、協議会がテーマ自体に左右されることはないと考える。

ベテラン教員の教育的財産の継承という点については、この①②の取り組みで少なからず実現できていると考えている。

### (2) 今後の課題

今後の課題は、「協議会の内容の充実」である。児童の事実から授業を考えているのに、協議会の話題が「子供がどう学んでいるかよりも、教師がどう教えているか」を中心に展開されていたからである。協議会の話題がどんどん授業全体の話になっていった最も大きな原因は、教える授業観であり教えられる学習観である。

本校内研究の取り組みを通して、それらの観を更新していくものにするためには、形式的にペアにするだけでは足りない。もっと質的な変革を求めていくことが重要だと考えた。そのような課題意識から、2月の3週間、所属校で授業を行った。若手教員8名の学級で授業をした後に、授業を題材にした学び合いを行った。

### (3) はじめの一步

本研究の協議会では、「行動の履歴を追うだけで、児童がどう学ぼうとしたか・なぜ学ぼうとしなかったか」等を話し合っていない現状があった。児童がその学習や課題に取り組みない原因を寄り添って考えられないその根っこには、教師自身の学習観があると考え。つまり自分も含めた多くの教師自身が、学習を（正確には授業を）伝達型・銀行型のものであると無意識に捉えているのではないかということである。だからこそ、「どう学ぼうとしているか」「何に興味をもったか」「自分なりの考えをもてたか」などの学習者としての育ちを観ようとせず、「わかったか、わかってないか」「伝わったか、伝わっていないか」という二元論で児童を観ているのではないか。だから、気付きも少なく授業の全体、つまり分かりやすく伝達できているかを観たくなるのだと考えたのである。つまり、校内研究の質的変革を進めるにあたっては、教師自身の学習観が更新されていくことが最も重要だと考えたのである。

そこで、教師自身が学ぶことを日常的にインフォーマルに行っていく必要があると考え、授業を題材とした学び合いを試みた。3週間で1年～6年までの8学級で18時間の授業をした。授業後の学び合いを重ねる中で、次のような若手教員の姿が見られた。①自分のめあての変容。授業後の学び合いにおいて若手教員自身のめあての質が更新されていった。②児童理解の深まり。自分の学級の児童への観方を交流することで、児童理解が深まっていった。③教員としての相談。「何のために教師になったのか」等、若手教員の現実の悩みを語る場となるなど、メンターとしての役割も果たしている。

今回の取り組みは、まだまだ試みである。今後は、フォーマルな校内研究と並行して、インフォーマルな教師自身の学びをデザインしていきたい。そしてその両面をフォーマルな校内研究の在り方として提案し、実現していくところに自分の考える校内研究の本来の可能性が発揮されると考える。今回の「教師自身が学び手となり、学びを追究していくこと」を自分の突破口にしながら、評価観や児童観、授業観を更新していく校内研究を追究していきたい。